4

杏蔭斎正骨要訣の校訂者和田謙堂の家系と同書の成立年代

蒲原　宏
日本歯科大学医の博物館

日本の正骨術の古典、吉原元棟（隆仙・？～一八〇〇）の『杏蔭斎正骨要訣』が天明七年（一七八七）以前に体系化し編述されたことを第一〇五回本学会で中津藩医大江定武（一七六八～一八二五）への吉原元棟直筆の正骨術允可状を根據に報告し、かつ三人の校訂者□村英仲（長州）・和田謙堂（龍野）・綾含弘（阿耶大哉・丸亀）によって本書が完稿した経緯について言及した。（本誌五〇巻一号）

その後、三人の校訂者について実地調査を行なったが□村英仲（長州）・綾太哉（丸亀）については、旧藩関係資料・地方文書資料・洋学史関係資料等からも全く情報を得ることができなかった。今後の調査続行の必要がある。綾含弘（阿耶大哉）は二宮彦可（獻・一七五四～一八二七）が文化五年（一八〇八）に『正骨範』を出版した時に校訂者として名を連ね、丸亀に在住していたのは確認できるが藩分限帳・町医記録になく詳細不明である。

綾含弘が『杏蔭斎正骨要訣』の最終校訂の附言追記の写本（京大富士川文庫本キ一四六）により校訂の経過を知ることができる。

これによると和田謙堂が綾含弘より先に帰国している。龍野藩儒家股野玉川（充美一七三〇～一八〇六）の日記『幽蘭堂年譜』によると、謙堂は天明二年（一七八二）六月十日長崎での医業出精で褒賞されているので、この年に帰国したと考えられる。従って『杏蔭斎正骨要訣』稿の校訂は天明二年以前に遡ることができることを提唱したい。

和田謙堂の正確な生没年は不明である。家系と略歴については寛政七年（一七九一）三月股野充美編の『諸氏略系・天部一・無足人家系譜』（龍野市立歴史文化資料館蔵）その他の藩関係資料によると大略次のようである。

祖父和田嘉右衛門の代に龍野藩（脇坂氏）に仕えた。父宗左衛門は高瀬番所元〆等を勤め、隠退後は静休と称した。謙堂は長男、妹二人、弟一人。初め医学を同藩の漢方医松尾静庵に学び一時姫路に住むが、京都の皆川淇園について学んでいる。ついで長崎に遊学し吉原杏蔭斎元棟に学び天明二年帰国。七俵加増され三十五俵に加増、天明四年に十人扶持となった。天明六年（一七八六）十二月二十四日侍医となり新知百石を賜った。寛政十二年（一八〇〇）には二十石加増、文化二年（一八〇五）にはさらに二十石加増され百四十石の藩医となった。

謙堂は名を績・門十郎・順伯、春堂と称した。皆川淇園には明和二年（一七六五）春に入門し、当時二十六歳とあるから、単純に逆算すると元文四年（一七三九）頃の生れと推定される。従って長崎から帰郷の天明二年（一七八二）には四十三歳となる。

妻の名は不詳であるが酒井雅楽頭臣増田宅右衛門の養女で男子三人女子六人あった。男子二人女一人は早世、三男順吉は医業を継がず、藩士前田四郎右衛門の三男純造（廉）を養子とし、池田瑞泉（京都）に学ばせ医系二代目をつがせている。二代春堂の長男は祖父と同じ謙堂を襲名し医系三代をつぐ。初名を先之助、字は純・号を謙亭、文化九年（一八一二）五月二十六日家督相続し百石を賜っている。弟謙斎は本多肥後守藩医菅江世民の養子となる。

三代謙堂の長男春堂（初名・謙太郎・恒）が医系四代をつぎ、弟の弥次郎が叔父菅江謙斎の養子となったが、廃藩後の行方は詳でない。また和田家の墓所についても現在のところ不明で、今後の調査が必要である。

初代和田謙堂は帰藩後、儒臣股野玉川との交流が密であったこと、門人橋田謙亭が伯州から入門するなどの行実が『幽蘭堂年譜』に見える。正骨術についての記録は未見である。

また長崎での吉原元棟以外の師系は不明である。『幽蘭堂年譜』天明二年六月十日の記事「和田謙堂長崎ヘ参リ医業出精之旨七俵御加増有之都合三十五俵之高ニナル、先頃謙堂長崎より持参之品色々差上候由」が傍証資料である。